

受難節第4主日礼拝説教「高い山へ！」

日本基督教団石神井教会 2018年3月11日

【旧約聖書日課】出エジプト記 24章12～18節

¹²主が、「わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。わたしは、彼らに教えるために、教えと戒めを記した石の板をあなたに授ける」とモーセに言われると、¹³モーセは従者ヨシュアと共に立ち上がった。モーセは、神の山へ登って行くとき、¹⁴長老たちに言った。「わたしたちがあなたたちのもとに帰って来るまで、ここにどどまっていなさい。見よ、アロンとフルとがあなたたちと共にいる。何か訴えのある者は、彼らのところに行きなさい。」

¹⁵モーセが山に登って行くと、雲は山を覆った。¹⁶主の栄光がシナイ山の上にとどまり、雲は六日の間、山を覆っていた。七日目に、主は雲の中からモーセに呼びかけられた。¹⁷主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。¹⁸モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜山にいた。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章1～6節

¹こういうわけで、わたしたちは、憐れみを受けた者としてこの務めをゆだねられているのですから、落胆しません。²かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、神の御前で自分自身をすべての人の良心にゆだねます。³わたしたちの福音に覆いが掛かっているとすれば、それは、滅びの道をたどる人々に対して覆われているのです。⁴この世の神が、信じようとはしないこの人々の心の目をくらまし、神の似姿であるキリストの栄光に関する福音の光が見えないようにしたのです。⁵わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。⁶「闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章2～10節

²六日の後、イエスは、ただベトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、³服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。⁴エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。⁵ベトロが口をはきんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」⁶ベトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。⁷すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」⁸弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

⁹一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。¹⁰彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

高い山へ

東日本大震災から丸七年となる今日、主日の聖書日課として与えられている旧約聖書と福音書の告げる物語は、御言葉を語るように立てられた者を少しばかり口ごもらせるもののようです。モーセに対して山に登ってくるようにと命じられる主なる神。三人の弟子たちだけを連れて、高い山に登られる主イエス。七年前のあの日、海から襲い来る津波を避けて高台へ、山へと逃れた多くの人々がありました。そして、逃れることができず失われた多くの命がありました。わたしたちの主なる神は、なぜ、多くの命を山の上へと逃れさせてくださらなかったのか。わたしたちの主イエスは、なぜ、限られた者しか、高い山へとお連れくださらなかったのか。七年経った今も、わたしたちの神に対する問いは、続いているように思われるのです。

主イエスは、三人の弟子たちだけを高い山へと連れておいでになりました。ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人です。そして、そこで、ご自身の真っ白に輝く御姿を、彼らにお示しになりました。彼ら弟子たちは、すぐに、昔モーセがシナイ山に登って神から律法を授けられたときの物語を思い起こしたことでしょう。そのとき、モーセは、主の栄光に包まれ、光り輝く姿を示すようになったのです。そのような主イエスの輝く御姿を、彼らは、いつか見せていただきたいと、願っていたに違いないのです。「**先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです**」と、ペトロは思わず口にしたほどでした。

この出来事の六日前、ペトロと主イエスの関係は最悪の状態になっていました。六日前、ペトロは、主イエスの問いに答えて「あなたは、メシア（キリスト）です」（8:29）と告白しましたが、主イエスがご自身の受難を予告されて「排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」（8:31）と告げられたことに反発して、結果として主イエスから「サタン」（8:33）呼ばわりされていたのです。二人のやり取りは、決して穏やかなものではありませんでしたから、ペトロは、もしかすると、しばらく主イエスと口を聞こうともしなかったのではないかと想像されるようなことになっていたのです。

そのペトロをほかの二人の弟子と共に連れ出して主イエスが高い山に登られたのは、あるいは、機嫌を損ねたペトロの気持を切り替えさせるためであったのかもしれませんが。多くの苦しみを受け、人々から排斥されて殺されてしまうというようなことが、メシア（キリスト）にあって良いわけがないと考えたペトロに、光り輝く栄光に包まれたご自身のお姿をお示しになられたのです。きっとペトロは、納得したことでしょう、「そうだ。メシアであられる主イエスには、光り輝く栄光に包まれたお姿こそ、ふさわしい」と。そして、口にしたのでしょう、「主よ、素晴らしいことです。ご栄光に包まれた主のもとに、わたしたちは居らせていただいています」と。

わたしたちも、同じではないでしょうか。主イエスは低きにおいでくださったお方だと知っていても、わたしたちは、主に高く引き上げていただきたいのです。高きで光り輝く主と共に居らせていただけることを、願っているのです。

ただイエスだけが一緒に！

もちろん、わたしたちは、そのように願ってもよいのだと思います。何よりも、わたしたちは、主の日ごとに集められる教会の礼拝で、主イエスのご栄光のお姿を見るように教えられてきたのでしょうか。「主の日」は、週の初めの日の「主がご復活された日」です。日曜日を「主の日」と呼ぶとき、わたしたちは、日曜日ごとに、主のご復活を記念し、祝っているのです。たとえ、主のご受難をおぼえる受難節であっても、日曜日だけは、なお主のご復活を記念する礼拝にあずかるように、導かれてきたのです。わたしたちは、ここで、主のご復活のお姿、天の御父と共にあられるご栄光のお姿を見るように導かれている。だからこそ、礼拝の中で、主イエスのご栄光を讃える「頌栄」も歌うのです。

けれども、わたしたちは、主の日の教会の礼拝から、再びこの世へと送り出される者でもあります。主のご復活を記念するところから、日々の生活の場へと、わたしたちは繰り返し送り出されていくのです。高い山に連れ行かれて主イエスの光り輝くご栄光の御姿をお見せいただいたペトロたちが、再び山を下り、人々の生きる世の中に連れ戻されたように、です。

しかし、ペトロたちは、主イエスを山の上に残してきたわけではありませんでした。主イエスと共に、山から下りてきたのです。山の上で光り輝く栄光のお姿をお示しになられていた主イエスと共に、山から下りてきたのです。もちろん、その主イエスは、すでに、山の上でお示しになられていたような光り輝くお姿ではなかったでしょう。元どおりの、自分たちと何ら変わらない姿の主イエスです。いいえ、それどころか、六日前に「必ず多くの苦しみを受け…排斥されて殺され」と予告されていた主イエスのお姿を、弟子たちは、あらためて見せられることになったのです。そのような主イエスだけが、山を下った後の弟子たちとなお一緒に歩んでくださるお方だったのです。

「**死者の中から復活するとはどういうことか**」。山を下るときに、弟子たちは、そのことを考え始めました。主イエスが、そのことを考え始めるようにお導きくださったからです。六日前、御自身の受難を予告された主イエス。多くの苦しみを受けて、人々から排斥されて殺されると告げられた主イエス。しかし三日目に復活することになっているとも語られた主イエス。その主イエスが死なれて、しかし、死者の中から復活されるとは、どういうことか。

このとき、高い山に連れ行かれた三人の弟子たちは、すぐに答えが出ることはなかったようです。だからかもしれません、この三人の弟子たち、ペトロとヤコブとヨハネは、再び三人だけ、主イエスに選ばれて特別な経験をさせられることになりました。主イエスが十字架刑に処せられる前夜、ゲッセマネの祈りの出来事のことです。そのとき、主イエスは、十一人の弟子たちを伴われていましたが、その中から三人だけをお傍に連れ行かれて、ご自身の祈りの姿をあからさまにお示しになられたのです（14:32 以下）。そこで三人が目当たりしたのは、御父の前に苦しみ悶えながら祈る主イエスのお姿です。苦しみを取りのけてもらうことを願いながら、なお「御心のままに」と祈られた主イエスのお姿でした。

「これはわたしの愛する子。これに聞け」

主の日の教会へとお導きくださり、御前に頭を垂れる礼拝にあずかせてくださり、ここで主のご栄光のお姿、復活のキリストのお姿を見るようにとお導きくださるお方は、ここで、わたしたちも、その御光に包まれるようになることを、お許しくださっているのです。ペトロと同じように、わたしたちは、ここで、「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と讚美して歌うことが許されている。けれども、主は、わたしたちを、ここから再び、それぞれの生活の場へと送り出されます。高い山から、再び、低き地へ、わたしたちの苦しみと悩みの尽きない、嘆きと悲しみの絶えることのない、災い多きこの世の生活の中へと、わたしたちは、送り出されるのです。

けれども、そのときこそ、主イエスはわたしたちと一緒においでくださるのです。わたしたちを高い山の上にお連れくださり、光り輝くご栄光の中に伴ってくださる主イエスこそが、わたしたちの日々の歩みを共にしてくださる。いいえ、わたしたちの日々の歩みに先立って、導いてくださるのです。その歩みの中で主イエスの後に従ってこそ、わたしたちは、再び、高い山へとお連れいただけるのです。ご栄光に光り輝く主のお姿を見させていただけるのです。

そうであれば、わたしたちは、ここに導かれたときにこそ、真っ白に光り輝く主のお姿をしっかりと見る者としていただきたいのです。そのお姿は、天からの御声によってしるしづけられています。「これはわたしの愛する子。これに聞け」。それは、主イエスが公生涯の初めに洗礼者ヨハネから洗礼〔バプテスマ〕を受けた際に、天から響いたのと同じ御声なのです、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(1:11)。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(8:34)とお告げくださった主に導かれて、「主の後に従いたい」との願いを持たせていただくようになったわたしたちは、そのしるしとして、主の御教えによって、洗礼を受けてきました。主がお受けになられたのと同じ洗礼です。まもなく迎えるイースターの祝いでも、わたしたちは、新しく洗礼の恵みにあずかる者を迎えることが許されるでしょう。そのとき、洗礼を受ける者は、主が洗礼をお受けになられたときに天から響いたのと同じ御声を聞くのです、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」。そのとき、洗礼を受ける者を見守るわたしたちは、ペトロらが高い山で聞いたあの御声を聞くのです、「これはわたしの愛する子。これに聞け」。

この御声が告げられる者のいるところに、わたしたちは、ご栄光の輝く光に包まれたお方、ご復活の主キリストのお姿を見るのです。この交わりの互いの中に、主イエスのお姿を見ているのです。その主イエスが、ここから出ていくわたしたちと共に歩んでくださいます。低きところを、なお主の御心のなされるところとして受けとめながら、先立ち進んでくださいます。そのお方こそ、高きに光り輝くお方なのです。もっとも低きところ、死の淵にまで臨まれるお方こそ、もっとも高く光輝く命の主でいらっしゃるのです。